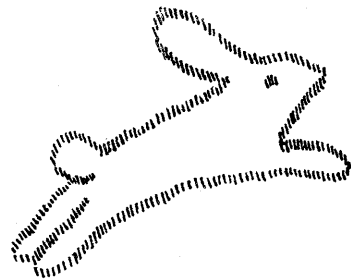


## 幼稚園の制服

蕪木寿江



「やつと四歳——、あこがれの幼稚園に入った」紺のスカートはいっぱしのお姉さんみたい、紺のズボンはしっかりしたお兄さんスタイル、誰にでも似合う紺と白の組合せが一段と清潔な感じがする。ついこの間まであぶちゃんをしていた子が一ぺんに大きくなったような喜びがある。お隣の〇ちゃんとも一緒の園服……仲間意識が生まれ、安堵感につながる。三人、四人……十人と並ぶと幼稚園の生徒になったんだなあという実感が湧く、家で

遊んでいる洋服の上にスモックを着せて登園させるよりは恰好がいい、しわくちゃなスモックはちょっと貧相な気がする、「〇〇幼稚園です」という誇りがある。センスのよい園服はその幼稚園の中味までよいような気がする。着ていく洋服について考えないでいいし、第一安直である。兄弟が着られて（ズボンは別だが）経済的である。女の子もおしゃれの競争をしないで済む、となかなかの好評。

「子供の生活は遊びそのものだから、特別制服をつくらなくてもいいのではないか。子供と言うものは何を着ても着なくても本来遊ぶ者である。その子に似合った服が着られるので私服の方がいい」などというもろもろの意見は父兄側からおそらく聞いたことがない。その幼稚園なりに考え、子供側に立っての考慮と信頼されているからなのだろうか。初めて出合う社会の一步から自分が選択をしない制服を着せられて、これでいいのかな、と始終頭のどこかにある。これが自由感を持った保育を目標にかかげている幼稚園であってよいのかと思う。ちがうからすばらしく、ちがうことが大切なんじゃあないか——と。

五十年の七月、ことばの発達のおくれているお子さんが大病院の紹介で見える。「幼稚園に行こう」と言うとき、さっさと靴を履いて嬉しがると言って、三十分近くかかる団地から、おんぶをして遊びに来た。やっと着いてすぐ帰る時もあり、一時間余りも遊びを見ているとき

があった。おんぶが一番安心の場所であり、おぶって走ると、「キャッキャッ」と声を立ててみそっぱをだして笑うようになった。六ヶ月の間、遊びに來たい時に来るようになり、先生方にも慣れ、ご両親の希望もあって十一月に入園した。「園服は無理に着せないで下さい」とあれほど念を押したのに、『よその子がいる』と言っていじめられるといけませんから』と言って着せたその朝、本人の相当な葛藤があったのだろう、五歳のひ弱な男の子が、その細い足でマンションのガラスを蹴飛ばして割り、怒り、非常な混乱状態なのできょうは休むという電話があった。この子の喜ぶことだけをしようとな家で理解し、感心するほど勉強していた親であったのに——。罪の意識にさいなまれていると一日おいてすぐに園服を着て見えた。よっぽど幼稚園に來たくて納得させられたのかしたのか、日に日に表情がでて子供らしく可愛くなってきた。

五十三年の十月、同じことばの治療教室からの紹介で

五歳の男の子が見える。どこの幼稚園へ行ってもことわられ、「こういう子がいると他の子供の教育に差し障り  
ますから」と、三ヶ所の幼稚園で同じことを言われたと  
か、人間不信のような半ばあきらめたような口調であつ  
た。電車を二つ乗りついで遊びに来るようになり、次第  
に母子共、明るくなってきた。母親も世間話をしたり、  
園庭でお弁当を食べたり、部屋の中にも入ってきたり、  
帰ることを忘れてよく遊んだ。言葉はおおむがえしだが  
少しずつでていた。専門家の先生ともよく連絡をとり指  
導を仰ぎながら三月に入園した。先の例もあり園服は着  
ないでもいいと話す、是非着せたい、本人が着たがっ  
ているし……と言うことで、サイズに合わせて手渡す  
と、お母さんはその園服を抱きしめて声をたてて泣い  
た。人前もはばかりず、「夢ではないか」「うちの子に本  
当に着せてもいいのか」といつまでも泣いていた。

現在も同じような症状の子供がお母さんと一緒に通園  
している。人間がこわくて、家から一步も出られず、た

まに外へ行くときは下を向いて歩き、人に逢うと道路に  
頭がつく程腰を曲げていたそうだが、先ず、お母さんと  
一緒にいると安心——お兄ちゃんといると安心——お父  
さんといると安心——と、安心感の貯えが少しずつ増  
え、今では先生と一緒にいると安心と成長してきた。

先生と手をつないでいると友達の大勢いる砂場も平  
気、仲のよい友達もできて、「ぶつ」という動作で話し  
かけるようになった。『親指ひめ』の劇には蛙になりた  
いと言ってお面をつくり、先生の周りで跳ねている。蛙  
になると先生の手を掴んでいなくても両手を床につけ  
て、両手でどしんどしんと高く飛ばす。(人間でいるより  
蛙の方が生活し易いのだろうか。)この男の子は園服を  
着ていない。着ることに抵抗があると言う。言葉を話さ  
ない子が寧ろ本当の事をしゃべっているのか、「好きな  
洋服でいいですよ」とお母さんに話してある。「よその  
子」だと誰も言わない。この友達のおかげで、保育の原  
点とも言うべき人間本来の、「共に生きる」という輪が  
自然にひろがっている。(神奈川県・市が尾幼稚園)